



公益財団法人
知床自然アカデミー
Shiretoko Nature Academy

Academy News Letter

No.34



2025-12

特集

知床ネイチャーキャンパス2025を開催しました！

現地実習・演習 9月10～12日：河川生態系の復元

現地実習・演習 10月1～3日：リカレント ヒグマ管理

オンライン講座、知床トークの報告 など

書籍紹介

「野生動物の保全と管理の事典」

開催報告

知床ネイチャーキャンパス2025

現地実習・演習
2025年9月10～12日

河川生態系の復元

現地実習・演習
2025年10月1～3日

リカレント ヒグマ管理

知床自然アカデミーの主要事業である教育プログラム「知床ネイチャーキャンパス」。2025年は、現地知床実習・演習を伴うプログラムを2回開催しました。主に学生を対象とした「河川生態系の復元」と、主に社会人を対象とした「リカレント ヒグマ管理」です。

今年、知床の世界自然遺産登録20周年。「河川生態系の復元」は、今年から3年間で知床が評価された生態系（海・川・森のつながり）を学ぶプログラムの第1弾として開催しました。8月16、17日のオンライン講義は44人が受講、そのうち24人が現地実習・演習に参加しました。

「リカレント ヒグマ管理」は、全国でクマの出没や事故が相次ぐ中、ヒグマの高密度生息地である知床の管理の実態や課題を学び、各地で生かしてもらおうと開催しました。現職の社会人を中心に18人が参加しました。

両プログラムとも天気に恵まれ、講師の皆さんとともに現地を歩き、学び、無事終了することができました。写真やアンケートの抜粋を掲載し、内容の一端をご紹介します。

8/16 - 17 オンライン講義

- 講義1 生物多様性を保全する河川管理とは？
中村 太士・北海道大学名誉教授
- 講義2 シマフクロウの生息環境回復と生息地拡大の試み
竹中 健・シマフクロウ環境研究会代表
- 講義3 知床の河川環境とオショロコマの現状
福井 翔・東京農業大学助教
- 講義4 住民主体のイトウ調査と保全活動
森 高志・斜里川を考える会事務局長
- 講義5 博物館による河川の生物調査と環境教育活動
臼井 平・知床博物館学芸員(生物担当)

9/10 - 12 現地実習・演習

実習フィールド: 知床世界遺産地域と周辺地域
演習会場・宿舎: ホテル知床

- 9/10 実習1 イワウベツ川流域
実習2 ペレケ川流域
訪問先 知床100平方m運動ハウス
知床森林生態系保全センター
振り返り・懇親会
- 9/11 実習3 斜里川流域
実習4 標津川流域
振り返り・ワークショップ
- 9/12 ワークショップ・発表会・修了式



オンライン講義
5名の講師陣に協力いただき、2日間で河川管理をめぐる講義を行いました。知床で行われている魚道や工作物の管理と現状、河川に関わるシマフクロウやサケなどの生き物の生態と保護管理の取り組みを学びました。受講生はこれを通して、知床での現地実習に向けて、知識の下準備を済ませました。

実習1(イワウベツ川流域)
知床の世界遺産地域内を流れるイワウベツ川。知床は海・川・陸のつながりが評価され世界遺産に登録されています。その価値を守るために、サクラマスをはじめとする魚類が遡上できるように、簡易的な魚道や河川工作物が整備されています。その魚道やダムを見学し、課題点は何か、それを解決するためにどのような対策がなされているか、その苦勞を学びました。

実習2(ペレケ川流域)
ウトロ市街地を流れるペレケ川は、河畔公園として地域の人々の憩いの場であり、サケマス遡上河川としても重要な川です。地域住民が散策に使う遊歩道を遡るように歩きつつ、河川を利用している鳥や魚を観察して、上流部ではダムとその脇に設置された大型の魚道を見学しました。

訪問先1(知床100平方mハウス)
かつての開拓地を買い取り、森を復元するためのナショナルトラスト運動「しれとこ100平方メートル運動」。人々が知床のために立ち上がった歴史と運動の概要、これから目指す先を知ること、森林復元の役割と実例を考えました。

訪問先2(知床森林生態系保全センター)
林野庁が行う知床の河川工作物の改良などについて、講義形式で学びました。その後はウトロ市街地で、クマ対策用の電気柵や、ゴミステーション「とれんべア」を見学。とれんべアについては、実際に扉を開けたり、中を覗いたり、開発途中の旭山動物園での飼育クマによる実験の様子を聞いたりしました。





実習3(斜里川流域)

希少なイトウが生息する斜里川。斜里川の河口域に始まり、中流域、支流で河川の状況を観察しました。下流域では釣り人やカワウ、中流域では耕作地や道路との兼ね合い、支流は地域の水資源としての要素など、同じ河川でもそれぞれの流域で状況は異なります。各流域での河川改良工事の相違点と共通点を学びました。

ワークショップ演習

その日の現地実習で学んだ内容をチームで振り返りました。振り返りでは、付箋と模造紙を活用しつつ、問題点の抽出と構造化、それらに対して感じたことの共有を行いました。プログラムの集大成となる発表会に向けて、河川生態系の復元について解決したいことを挙げ、解決策の提示とその理由、解決策の有効性を評価するモニタリング内容を考えました。

実習4(標津川流域)

標津川は世界遺産地域周辺を流れる河川で、世界遺産地域同様の希少種の生息河川です。標津川の魚類を守ることが、知床の魚類や、魚を餌とするシマフクロウを守ることにもつながります。受講生は川の中に入り、市民が設置した魚倉を水が流れる様子や、水中に棲む生き物を観察し、包括的に生態系を捉えることの重要性を学びました。

発表会

プログラムを総合的に振り返り、河川生態系の復元に対して何ができるか、解決策を各チームで発表しました。より多くの人に河川問題を身近に感じてもらうために、サケの遡上体験ができる「ノボリンピック」や「NG行動かるた」を提案するチームや、ペレケ川の観光と市街地の安全を両立する展望スポットを設置するチームなど、各々が検討した多様な案が発表されました。

知床ネイチャーキャンパス2025 河川生態系の復元

受講生の声 (印象に残ったこと・改善すべきと感じたこと)

オンライン講義

砂防ダムの改善は魚道ありきという頭になってしまっていたため、非常に勉強になりました。自身が公務員（ダム管理の部署ではありませんが）であり、事業や思いの継続性に難ありという点はどの分野においても変わらないのだなと身につまされる思いです。

多方面からのアプローチで河川での取り組みを知ることができ、どの講義がということではなく総合的な理解という点で全ての講座に学びがありました。

目からうろこが数十枚落ちた感じ。自分も鱗を落としボロボロになって上流までたどりついたサケになった気持ちになりました。

現地実習・演習

実際川に入って生き物と触れ合えたクテクンベツ川の実習が印象に残りました。加えて、懇談会では普段硬そうに見える先生方と楽しく交流でき、講義内では伺えなかった貴重なお話をいただけたので、すごく楽しかったです。

知床地域での自然再生の取り組みや人と動植物の共生の考え方について勉強することができました。プログラムに参加しなければ、知らなかったかもしれないので良い機会になりました。

講師の先生方やスタッフの方々は、どの方もオープンで、話しかけやすかった。大学の教員だけでなく民間や博物館など講師陣の所属が多様である点がよかった。

現地実習でもう少し踏み込んだ内容を体験してみたい。

構造物や河川の管理者からも話を聞けたら良かった。研究者や活動家からの話だけだと、取り組みの良い面しか見えず、なぜ河川が改修されてしまったのか、進みにくいのかといった社会課題が見えにくく、ワークショップの議論が深まらないと感じた。

今回は大学生以上の方しか参加されてなかったのですが、高校生にも参加してもらえればいいなと思いました。こういった機会が大学選びなどにも繋がるいい機会にもなると思うので、是非もっと宣伝して欲しいと思いました。

受講生について

オンライン講義

参加者数	44人	性別	
高校生	1人	男性	24人
専門学校生	1人	女性	19人
大学生	21人		
大学院生	3人	お住まい	
社会人	18人	北海道内	17人
		北海道外	27人

現地実習・演習

参加者数	25人	性別	
大学生	18人	男性	13人
大学院生	2人	女性	12人
社会人	5人		
		お住まい	
		北海道内	9人
		北海道外	16人

受講した学生・社会人の所属

北海道大、北海道教育大、酪農学園大、岩手大、筑波大、早稲田大、東洋大、名古屋大、琉球大
行政職員（環境省、北海道、市町村）、教員、NPO法人職員、民間会社職員

8/23 - 9/28 オンデマンド講義

- 講義1** ヒグマの生態と管理
間野 勉・北海道立総合研究機構フェロー
- 講義2** 北海道のヒグマ保護管理をめぐる最近の取り組みと課題
間野 勉・北海道立総合研究機構フェロー
- 講義3** ヒグマ管理計画の策定と運用の実際
松田 裕之・横浜国立大学総合学術高等研究院 上席特別教授
- 講義4** 知床のヒグマ管理現場の実際と課題
金川 晃大・公益財団法人知床財団 事業部 保護管理事業係長

10/1 - 3 現地実習・演習

実習フィールド：知床世界遺産地域と周辺地域
演習会場・宿舎：ホテル知床

- 10/1** 実習1 国立公園内のヒグマ管理
(知床五湖・イフウベツ川)
実習2 市街地のヒグマ管理1
(ウトロ市街地)
- 10/2** 実習3 市街地のヒグマ管理2
(羅臼市街地)
実習4 ヒグマに関する普及啓発
(羅臼ビジターセンター・知床自然センター)
振り返り・ワークショップ・懇親会
- 10/3** ワークショップ・発表会・修了式

オンデマンド講義

ヒグマの生態や管理についての基礎知識を習得してもらうため、3名の講師の方に4本の講義を収録していただき、オンデマンド講義として配信しました。基礎知識の他にも、ヒグマ管理の基礎となる北海道や知床のヒグマ管理計画の考え方や、現場の実態や課題などを解説いただきました。期間中、受講生には自身のペースで講義を聴講し、現地実習演習に備えて学びを深めてもらいました。

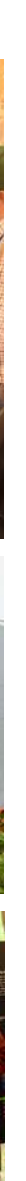
実習1

知床ネイチャーオフィスのネイチャーガイドの方々の案内で、ヒグマ生息地内であり、知床最大の観光地である知床五湖の地上遊歩道（一湖と二湖の小ループ）を散策しました。知床五湖では連日ヒグマが出没しており、緊張感もある中での散策でしたが、観光と両立する現場のヒグマ対策やガイドの役割を学び、外国人観光客の多さなど昨今の状況を肌で感じることができました。

実習2

斜里町ウトロ市街地のヒグマ対策について、知床財団の金川講師から詳しくお聞きしました。企業からの寄付で設置されたヒグマ対策ゴミステーション「とれんべア」やウトロ市街地を囲む電気柵、市街地を流れるベレケ川、知床ウトロ学校付近などを視察。実際のヒグマ出沒時の現場の動きや、2023年の大量出沒時の過酷な勤務など、現場で働く人たちのリアルな状況を学ぶことができました。





実習3

2日目は知床半島東側の羅臼町に移動し、田澤講師から斜里町とは地形や産業に違いのある羅臼町のヒグマ対策を学びました。羅臼ビジターセンターのジオラマや羅臼町役場の展望台で、羅臼の地形やヒグマ対策のゾーニング状況を確認し、海岸沿いのヒグマ出没現場などに足を運びました。田澤講師からは、ハンターとして現場対応中に怪我をしてしまった話など、貴重なエピソードをお聞きすることができました。

実習4-2

知床自然センターでは、知床財団の萱野講師から、主に観光客に向けた普及啓発活動についてレクチャーを受けました。ビジターに正しい知識を得てもらふ工夫や難しさ、さまざまな取り組みについて説明していただきました。またセンターで上映しているヒグマとの距離感を考えてもらふ映像作品「THE LIMIT」を鑑賞しました。

実習4-1

羅臼ビジターセンターで、知床財団の坂部講師から、ヒグマに関する普及啓発についてのレクチャーを受けました。主に町民への啓発や、幼稚園から小中学校、高校に至るまでのクマ学習の取り組みについて詳しくお聞きしました。ルールやマナーを身につけるとともに、ヒグマがいる自然豊かな町で生まれ育ったことを誇りに思えるように、という言葉が印象的でした。

ワークショップ・発表会

各チームに分かれてそれぞれの実習の振り返りを行った後、講義と実習での学びを踏まえ、明らかになった課題を解決する方向の「ヒグマ管理方針」を話し合いました。人側の意識を変える必要性を訴えるチームが多く、正しい知識を普及するレンタカーシステムの構築や、人手や予算不足を補うクラウドファンディングの提案など、さまざまな方針が示されました。

アンケート 抜粋

知床ネイチャーキャンパス2025リカレント ヒグマ管理 受講生の声（印象に残ったこと・改善すべきと感じたこと）

オンデマンド講義 現地実習・演習

実地研修を通し同じものを見たり聞いたりしていても、知床財団の方々や講師の方々、受講生の中でもヒグマに関する視点や考え方が根本的に違っているのかもしれないと振り返りの時間やチームでの演習で感じたことが印象的だった

学びの多い貴重な時間を得られましたので、来年度以降も継続して実施していただけるといいなと思います

斜里と羅臼の地形や居住職種によるメリット、デメリット

講師の先生方のご意見・ご指導はじめ、このアカデミーを通じてでないと聞けないような、知床の最前線で働く方の現状をふまえたリアルな実態を知れたこと

振り返りの発表について、やはり取っ付きやすい「人の行動改善」にとどまってしまい踏み込んだ考察ができなかったという反省があった。皆ある程度覚悟を持ってきていると思うので、ヒグマの生態や捕殺など、踏み込んだ内容について結論を出す方向性を出したい

ヒグマの面白さ（強さ、でかさ、頭の良さ、社会性）

「クマなれ人」という言葉が聞いたことない言葉だったので、知床ならではの言葉だなと思いました

前提知識（ヒグマの頭数や出没状況）など事前講習で学んだ内容について、初日に振り返る時間があるといいのではないかなと思った

知床で長年活動されている民間団体・行政・有識者の方々から参考にさせていただきたい点が多々あったなと思います。今回は人間側の対策がフューチャーされていましたが、次はぜひヒグマの生態や社会およびそれらの変化も聞いてみたいです

受講生について

参加者数 19人

年代

10代	0人
20代	8人
30代	2人
40代	5人
50代	2人
60代	2人

性別

男性	10人
女性	9人

お住まい

北海道内	13人
北海道外	6人

受講生の所属

行政職員（北海道、道内市町村）、民間企業職員、獣医師、大学生、専門学校生など

開催終了

「観光スポットで知る世界自然遺産」をテーマに 「知床トーク2025」を開催しました！

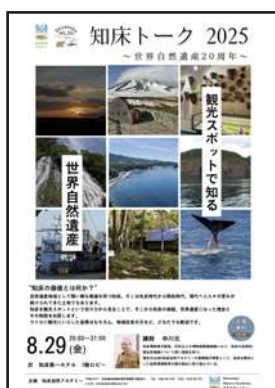


2025年8月29日夜、斜里町ウトロの知床第一ホテル1階ロビーで、知床トーク2025～世界自然遺産登録20周年～「観光スポットで知る世界自然遺産」を開催しました。宿泊客や地元住民の皆さんなど、約30名の方にご参加いただきました。

「知床の夕陽はなぜ美しいのか？」「知床横断道路は開通までなぜ18年がかかったのか？」一。中川元・当アカデミー業務執行理事が、知床五湖や知床峠、観光船航路など、観光客の皆さんにも馴染みのさまざまな観光スポットという切り口で知床の自然や歴史について解説。2025年が世界自然遺産登録20周年ということで、知床の価値や世界遺産になった理由、知られざる物語などをお伝えしました。

知床トークの様子は、当アカデミーのYouTubeチャンネルで公開しています（1時間10分）。興味のある方はぜひご覧ください！

公益財団法人 知床自然アカデミー YouTube
「知床トーク2025 観光スポットで知る世界自然遺産」
<https://youtu.be/Spky2sZTIJE>



開催終了

2つのオンライン連続講座を開催しました！ 「実践 野生動物管理学」「希少種の保護管理Ⅲ～Ⅴ」

2025年6月に始まった知床ネイチャーキャンパス（SNC）オンライン「実践 野生動物管理学」は12月17日で全14回の講座を終了。同名の書籍（培風館発行）を教科書に、生物多様性の基礎からクマ類など個別野生動物の生態や社会的な課題について、著者である8人の専門家に講師を務めていただきました。定員通り80人が受講。全講座を受講し小テストやアンケートに答えた方には修了証を授与します。講義期間中はクマの大量出没と重なり、熱心にご受講いただきました。

1月から続くオンライン講座「希少種の保護管理」は、Ⅲタンチョウ編（7～8月開催）、Ⅳ海鳥編（9～10月開催）、Ⅴ猛禽類編（11月開催）を終了し、12月～1月にⅥ鰐脚類・ラッコ編（10p参照）を、1月～2月にⅦ希少種のない未来へ、で完結します。希少種研究者・実務者の第一線で活躍中の15人に講師を務めていただく全21回の貴重な機会。「実践 野生動物管理学」ともども映像教材として来年度以降もご覧いただく機会を設けます。



開催中

オンライン講座「希少種の保護管理Ⅵ」を開催！

鰐脚類（アザラシ・トド）・ラッコ編



2025年1月に始まったオンラインによる「希少種の保護管理」講座の第6弾です（Zoom利用）。今回は海棲哺乳類の仲間から鰐脚類（アザラシ・トド）とラッコをテーマに、第一線の研究者が最新の知見や研究成果、課題などを解説します。1週間程度の見逃し配信期間も設けています。

日程・テーマ・講師（いずれも火曜19:30～21:00開催）

Ⅵ 鰐脚類・ラッコ編

- 2025年12月9日 講師・小林万里さん（東京農業大学 生物産業学部 海洋水産学科教授）
「鰐脚類の保護管理概論」
- 2025年12月23日 講師・三谷曜子さん（京都大学野生動物研究センター教授）
「ラッコの生態と生息地保全」
- 2026年1月6日 講師・小林万里さん（東京農業大学 生物産業学部 海洋水産学科教授）
「鰐脚類の生態と行動 アザラシ・トド」
- 2026年1月13日 講師・蔵本洋介さん（環境省大山隠岐国立公園管理事務所長）
「ゼニガタアザラシ 保護管理のための協働」
- 2026年1月20日 講師・松田裕之さん（横浜国立大学総合学術高等研究員 上席特別教授）
「ゼニガタアザラシ・トド 共存への展望」

共通講義 講師・鳥居敏男さん（元環境省自然環境局長・知床自然アカデミー業務執行理事）
「希少鳥類保護の制度と事業」

※共通講義は、新規受講者に限定配信で聴講いただけます

活動支援のための

賛助会員・寄附金のお願い

知床ネイチャーキャンパスをはじめとする当アカデミーの事業は、皆様からの浄財によって行われています。一層のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。詳しくはホームページ、または当アカデミー事務局までお問い合わせください。

知床自然大学院大学設立財団ホームページ
賛助会員・寄附金募集ページ
<http://shiretoko-u.jp/supporter/>



■ 賛助会員の年会費 ※年度ごとの納入となります。

個人会員	5,000円
団体会員	10,000円
法人会員	20,000円
法人特別会員	100,000円

■ 寄附金について

寄附金も随時募集しています。賛助会員加入同様にお申し込みください。

加速化する野生動物とヒトとの軋轢・・・

野生動物管理の体系的な知識が一冊に！



『野生動物の保全と管理の事典』

『野生生物と社会』学会 編集

日本哺乳類学会・日本鳥学会編集協力

¥18700 朝倉書店

このところ、連日、クマ類（ヒグマ・ツキノワグマ）の居住地への出没や人身被害が報じられており、異常事態が日常になりつつある。クマ類ばかりでなく、シカ・イノシシ・サルなどの野生動物の多くが分布拡大と生息数増加しており、農林業被害の増加、都市域への出没、感染症など、野生動物とヒトとの軋轢が加速化している。このような背景のなか、「野生動物の保全と管理の事典」は、野生動物管理に関する体系的な知識を集積して提供するために、『野生生物と社会』学会が総力をあげ、日本哺乳類学会と日本鳥類学会の協力を得て、本年10月に刊行された。

総論では、野生動物管理にかかわる原理原則、歴史、法律、人材、制度などの社会的側面のほか、野生動物の個体群動態、疾病、生息地利用、分布拡大要因、外来種対策、獣害対策、被害管理、資源利用、風力発電など、分布と個体数増加に関する生態学的側面や対策が述べられている。各論では、生息数推定、被害防除方法、アーバン・ワイルドライフ対策、捕獲技術などの管理技術、都道府県や市町村による管理計画のほか、鳥獣種別の生態的特定を踏まえた管理方法などが紹介されている。

総論・各論とも、第一線で活躍されている研究者の手により、野外調査に基づいた最新の情報が盛り込まれ、読み物としても興味深い。総論・各論とも、トピックごとに参考文献が記述されており、また、詳細な索引が整備されているため、学生、関連研究者、野生動物管理に携わる実務者にとっても、役立つ事典となっている。

なお、知床自然アカデミーでは、『実践野生動物管理学』（鷺谷いづみ編著、培風館）に基づくオンライン講座を実施しているが、そのバックグラウンドとなる事典（用語の定義も含め）としても活用してほしい。



navigator

かじ こういち

梶 光一

兵庫県森林動物研究センター所長・東京農工大学名誉教授・公益財団法人知床自然アカデミー代表理事

職員日記

今こそ“生き物屋”という専門技術に光を



ここ数か月、クマ類の市街地への出没が全国的に頻発し、社会の注目を集めている。だが、世間の反応を見ると、SNS上でありとあらゆる意見と感情、野次が交錯し、もはや騒動とでも呼べるものに変質してしまっている。クマ問題に限らず、自然にかかわる問題は、パニックに近い騒動に発展しやすいと常々感じる。これは、日本でいかに自然や野生動物に関わる社会問題が見過ごされてきたかを反映していると感じている。

日本はよく、自然や環境への関心が低いと言われる。ある調査でドイツと日本の各社会問題への関心度を調べたところ、ドイツは環境や生活の質、持続可能性に関心が高い一方、日本は経済的要素を持つ社会問題に関心が偏っていたようだ(注)。野生動物や自然に関する問題は、今まで「(短期的に)金銭的利益を産みにくい」「緊急性が高くない」と優先順位が下げられてきたと感じる。それは人々の意識にも影響を与え、問題への関心度が上がらない。そして突然問題が現実突き付けられた時、得体のしれないものに突如脅かされ、それが不安に繋がるのではないだろうか。

人々が不安やパニックに陥りやすい原因、そして問題を身近に感じにくい原因は、もう一つあると思う。それは“技術者を含む専門家の精神的不在”である。多くの場合、機械系ならエンジニア、医学なら医者などと、分野ごとにある程度代表的な専門職、“〇〇屋”があり、基本的には専門技術があればその分評価を受け活動もしやすい。一方で、野生動物・自然に関わる分

野の専門家は、パッと皆が思いつく“生き物屋”としての専門職があるとは言い難いと感じる(当アカデミーが提唱するワイルドライフ・マネジャーはまさにその存在な訳だが)。

先日、高校で生物学を選択していた知人から久々に連絡が来た。その知人は元々企画や営業の仕事をしているが、やはり自然に関わる仕事がしたいと、今は転職活動をしているらしい。印象に残ったのは「自然関係で、安心できる待遇と賃金がある仕事を探すのは難しい」という発言だった。実はこれはよく聞く話で、私の周囲で他にも「勉強としては好きだが、仕事のイメージが湧かず将来への不安が残る」「就けたとしても待遇が悪いから」と、この道を諦めていった人は多い。人々の自然に関わる問題への関心を高め、安心をもたらすため、そしてしっかりと問題解決へと進むためにも、今こそ専門技術への適切な待遇を伴う“生き物屋”という受け皿が社会に必要なのではないかと。

当アカデミーのオンライン講座『実践 野生動物管理学』第12回では、イギリスの国有林でのdeer manager(シカ管理官)が話題に上がった。これはまさに生き物屋の例である。クマ問題に限らず、日本全国で自然に起因する社会問題は生じ続けている。人々は不安に駆られ、安心と解決を求めている。まずは社会問題として取り組む環境がもっと整えられることを、切に願う日々である。

事務局 木立 真凜(きだち・まりん)

(注) 一般社団法人IESS, 「社会課題に関する3か国(日本・米国・ドイツ)意識調査の結果 ―生活者、働き手、消費者、投資家、有権者としての意識―」, 2021



公益財団法人

知床自然アカデミー
Shiretoko Nature Academy

〒099-4117

北海道斜里郡斜里町青葉町28番地10

TEL: 0152-26-7770 FAX: 0152-26-7773

E-mail: sizendaigaku@wine.plala.or.jp

WEB: <https://shiretoko-u.jp>



Facebook @shiretoko.u
X @sizendaigaku
Instagram @shiretoko_u

アカデミー ニュースレター(会報誌) No.34

発行日 2025年12月15日

発行 公益財団法人 知床自然アカデミー